アンコール遺跡タニ窯跡群第3次調査報告（期間：1998年9月1日～13日）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青柳, 洋治, 佐々木, 達夫, 田中, 和彦, 野上, 建紀, 丸井, 雅子, Aoyagi, Yoji, Sasaki, Tatsuo, Tanaka, Kazuhiko, Nogami, Takenori, Marui, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000205

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

6. アンコール遺跡タニ窯跡群第3次調査報告

（期間　1998年9月1日～13日）

青柳洋治／佐々木達夫
田中和彦／野上建紀／丸井雅子

1．はじめに

カンボジア北西部シェムリアップ州のトンレサップ湖北西一帯（アンコール地方）に広がるアンコール遺跡群の東側に窯跡が位置する。タニ窯跡群は、アンコールトムの中心バイヨンから東17km、東バライの東北石柱から東北東6 km、平地に小高く盛り上がるプノンボクの中央から東北東3 kmに位置する。バカオン窯跡はタニ窯跡群の西南西9 kmに位置する。カンボジアではアンコール遺跡の東北方30～40kmにあるプノン・クレンに窯跡のあることが19世紀末から知られていたが、実態は不明瞭であった。クレン山丘とアンコール遺跡群の中間地域の平地部で窯跡群が発見された歴史的意義は大きい。今回の調査目的は窯体の形態・構造の解明である。

2．アンコール遺跡タニ窯跡群B地区マウンド1の調査経過

1995年8月、アンコールワットの東約20kmのルンタエック村タニ部落で焼き物片が散乱する場所が発見され、窯跡であることが確認された。近隣の地でバカオン窯跡も同時に発見された。十数km離れたプノン・クレンで19世紀末に窯跡が発見されて以来、百年を経た新たな窯跡発見となった。現在、アンコール遺跡タニ窯跡群はAからEの5群で構成されることが確認されている。

1996年8月の第1次調査では、窯跡が1地区ではなく、複数の地区に分かれて存在することを確認し、その分布調査を実施した。A区は6基、B区は7基、C区は1基、D区は1基を確認

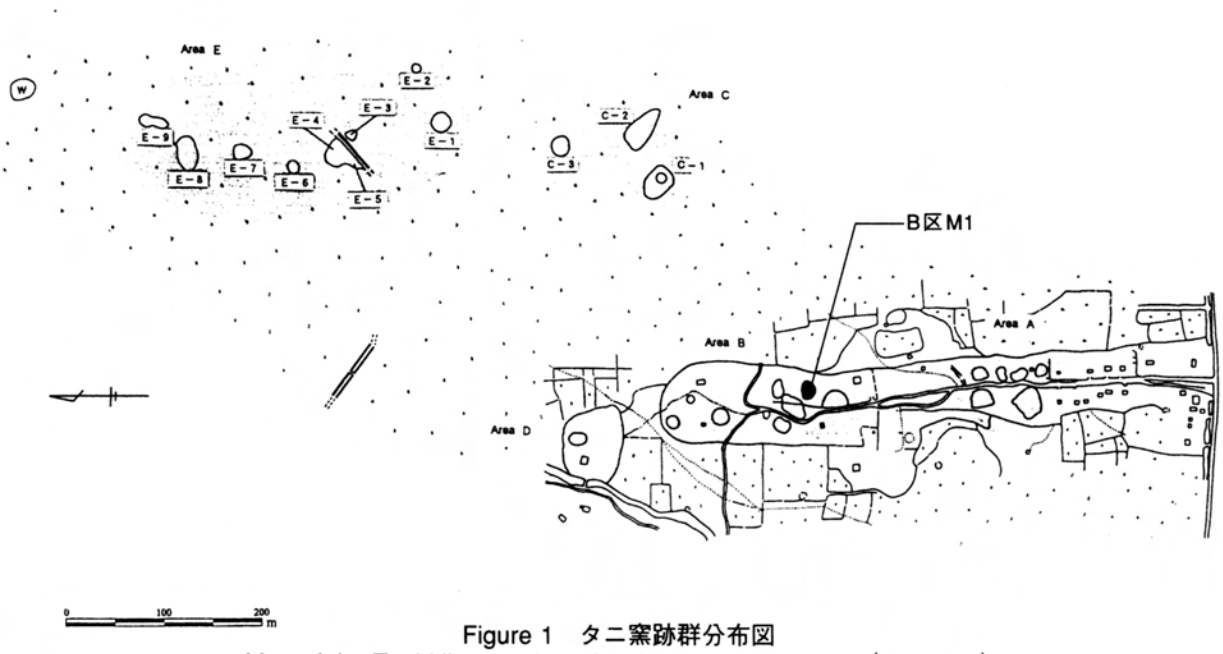


Figure 1　タニ窯跡群分布図
Map of the Tani kiln complex, showing kiln B1 in Area B(black dot)

し、分布図を作成した。

併せてB地区マウンド群の南側に位置するマウンド1をトレンチ調査した。これは現在のカンボジア領域内におけるクメール陶器窯跡の最初の発掘調査となる。トレンチ調査の結果、マウンド内に窯跡が残存し、窯跡周辺に崩れた窯壁や廃品等が堆積して、現在のマウンドが形成されたことが推定できた。ただし、現地発掘期間4日間で短いため、窯跡の具体的構造は不明であった。

1998年3月のタニ窯跡第2次調査では、タニ窯跡の分布調査を再び実施し、これまで発見された窯跡群より北方にE群を発見すると同時に、C群で2基を追加した。タニ窯跡群は5群からなる大窯跡群であることを確認した。Aは6基、Bは7基、Cは3基、Dは1基、Eは9基のマウンドないし窯跡が残存する。

また、1997年、1998年に奈良国立文化財研究所の地図作成調査、電磁探査、地中レイダ調査などもタニ窯跡群で実施された。

3. 調査日程（1998年9月1日～9月13日）

9月1日(火)

成田・関空発バンコク経由プノンペン着

9月2日(水)

晴、プノンペン朝発シェムリアップ着。Sophia training and cultural centerで調査打合せ。B地区のマウンドに南側の1から北側の7まで番号をつける。トレンチ調査したマウンドは元のまま1とする。A地区は西南部のマウンドを1、東側に並ぶマウンドを南から北へ2、3、4、5とし、西北側へのマウンドを6とする。1の北側に少し離れたマウンドが6となる。

9月3日(木)

晴。プノンペンから来たAPSARAのスンクン氏と打合せ。B区M1窯跡の形態を明らかにする発掘を行う。日本人、スンクン、ラオ氏がタニ窯跡現地視察。タニ部落長、寺に挨拶。部落長に本日中にB区M1の草刈り、トイレ、休憩所設置を依頼。明日から10人の作業員を依頼。謝金は郡長と相談して決める。出土品はマウンド南の井戸水で洗うことを依頼する。寺とタニ部落の間の橋が一部損壊し、車が泥水に漬かり動けず、軍のトラックで救助される。夕方、発掘機材点検、消耗品の購入。

1996年作成図の海抜は、＋2.5mする。M1実測図0ポイント（トレンチ交点）は37.3mから39.8mと変更する。1996年発掘時に十数本残した釘や木杭は、トレンチ端の2本の木杭が残る。

9月4日(金)

晴、夕方雨。6時食事。6時20分出発。車3台。スンクンさんの個人のトラックを含む。日本人6名、カンボジア人上智スタッフ6名（学生2名含む)、スンクン、ラオ、APSARA遺跡警察官2名。郡長、僧侶2名、タニ部落作業員10名、自警団2名。ルンタエク寺とタニの間の橋で車が泥水に漬かり、トラックで引き揚げる。7時半現場作業開始が少し遅れる。僧侶2名

が発掘開始の祈りをあげ、関係者及び村人多数が参加。タニ窯跡群B区M1発掘開始。1996年発掘のトレンチ埋土を排除。11時30分作業終了。昨日残っていた木杭2本がない。奈良国立文化財研究所の地形測量のポイント24の釘がBM1の頂上部の木の根に残るが、昨日まであった青色プラスチック部分がなく、釘だけ残る。ルンタエク寺とタニ部落の間の木橋をスンクン氏、ラオ氏を通して寺に頼み修理。

9月5日(土)

晴、夕方雨。6時食事。6時20分出発。車2台。日本人6名、カンボジア人上智スタッフ6名（学生2名含む)。APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作業員10名、自警団1名。7時40分現場作業開始。1996年発掘のトレンチ埋土排除を継続。併せてマウンド頂上部分の清掃をする。白色砂塊上に赤色砂塊（焼土）が堆積しており、窯跡の床面の可能性がある。マウンド1を4区に分けて出土品を採集する。交点は1996年調査時の0ポイントを東側に1m移す。ＩＡ（トレンチＩＡを含みトレンチＩＡの西側)、ＩＢ（トレンチＩＢを含みトレンチＩＢの西側)、ⅡＡ（トレンチⅡの北側)、ⅡＢ（トレンチⅡを含む、トレンチⅡの南側)。トレンチ内埋土撤去中にポイントを示す鉄釘4本発見。寺とタニ部落の間の木橋完成。スンクン氏、ラオ氏の2人が協力のため窯跡訪問。11時30分作業終了。スンクン氏、ラオ氏と日本人でGrand Hotel d'AngkorでDinner。

9月6日(日)

晴、夕方雨。6時食事。6時20分出発。車1台。日本人5名（青柳、佐々木、田中、野上、丸井)、APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作業員10名（自警団員含む)。7時40分現場作業開始。1996年発掘のトレンチ埋土排除を継続。マウンド頂上部分の焼土塊の広がりを清掃し1/10で実測する。平面図にレベルを記入する。ⅡＢ区の表土を掘りはじめる。ルンタエク寺の僧侶達、窯跡見学。11時30分作業終了。午後、バンテアイ・スレイ見学。赤色ラテライト切石彫刻の瀟洒な10世紀後半の建物。

9月7日(月)

晴。6時食事、6時20分出発。車2台。日本人6名、APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作業員10名（自警団員含む)、ウックスンヘン。7時40分現場作業開始。ⅡＡ区、ⅡＢ区の発掘。ともに表土を剥ぐ。ⅡＡ区では赤白土が混じる層位上面と、部分的に赤色焼土が現れる。窯跡が地表近くに残る可能性が強い。ⅡＢ区はまだ下まで掘れる崩れ土が現れる。形の残りのいいものは、図に位置を落とし、レベルを記入し、地区ごとに出土品に番号をつける。マウンド頂上部分の赤色焼土の範囲を木の上から撮影。奈文研測量ポイント24の木の根を切ったので、ポイントを西に1.9m移動し、木の根に頭が十字の釘を打つ。釘頭高さ39.954m。ルンタエク寺の僧侶達、窯跡見学。11時30分作業終了。

9月8日(火)

晴。6時食事、6時30分出発。車2台。日本人6名、APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作

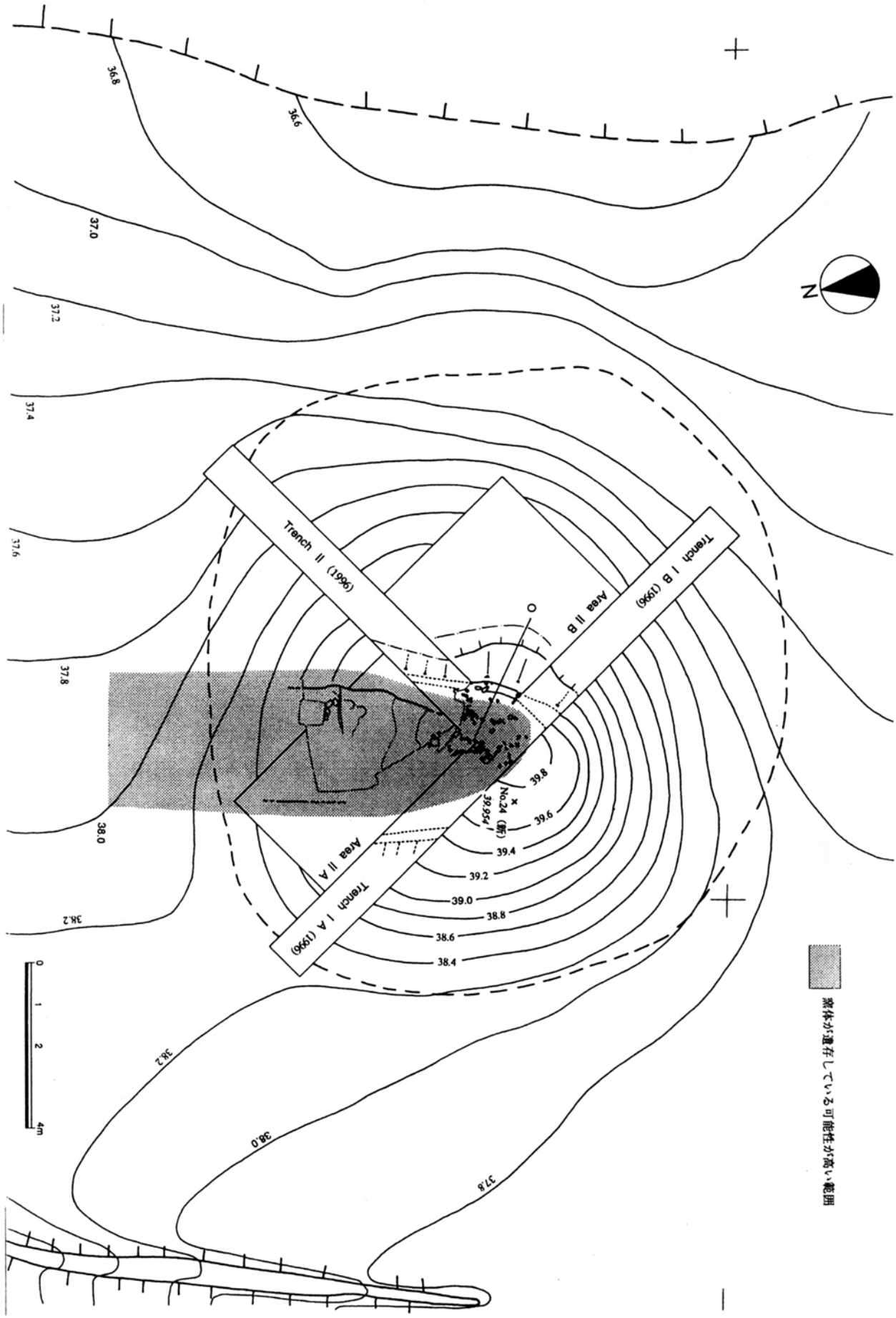


Figure 2　タニ部落B区マウンド1
Mound 1 in Area B of the Tani kiln complex

業員10名（自警団員含む）、ウックスンヘン。7時35分現場作業開始。ⅡA区、ⅡB区の発掘。ともに表土剥ぎを継続する。ⅡA区では赤色砂塊・白色砂塊が混じる粘土層の上に部分的に赤色焼土が現れる。北から南にマウンド頂上部へ傾斜して登る窯跡が表土の下に現れる。破壊程度が大きく、残存部分はわずかであるが、壁基礎部分のラインが復元できる。室内最大幅2.8m、長さ5.3mまでは残る。当時の地面上に最高部分で高さ3.2～3.5m近く粘土を長方形状で片側は低く積み上げたことがトレンチの状況などから推定できる。

ⅡB区は発掘を継続し、2層を発掘する。窯跡部分をマウンド頂上にそびえる木の上から撮影する。カンボジア人国連職員が窯跡調査見学。11時30分作業終了。プノンペンは反政府デモで騒がしい。

9月9日(火)

晴。6時食事、6時30分出発。車2台。日本人6名、APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作業員10名（自警団員含む）、ウックスヘン。7時35分現場作業開始。ⅡA区。赤色砂塊・白色砂塊混じり積み上げ粘土上の赤色焼土を清掃する。壁の高まりは残らない。壁基礎部分のラインがほぼ復元できる。窯跡の上方半分を実測、撮影する。下方と上方の一部は次回の調査で明らかにすることになる。

ⅡB区は2層の発掘を継続する。窯跡基礎積み上げ土の範囲を部分的に明らかにする。残りは次回に調査する。11時30分作業終了。バイヨンで調査中の慶応大学環境情報学部久保幸夫教授の測定によると、バイヨン地点で磁北は真北の東側1.3度にある。

9月10日(木)

晴。6時食事、6時30分出発。車2台。日本人5名（青柳、佐々木、田中、野上、丸井）、APSARA遺跡警察官2名。タニ部落作業員10名（自警団員含む）、ウックスンヘン。7時40分現場作業開始。窯跡レベル測定。ビニール紐？を編んだ米袋に土を入れ、トレンチ部分を埋め、窯跡部分を覆う。賃金を支払い、撤収。10時30分遺跡発。プノン・バケンからプノン・クレン、アンコール・ワットを遠望し、アンコール・ワット西参道に行く。

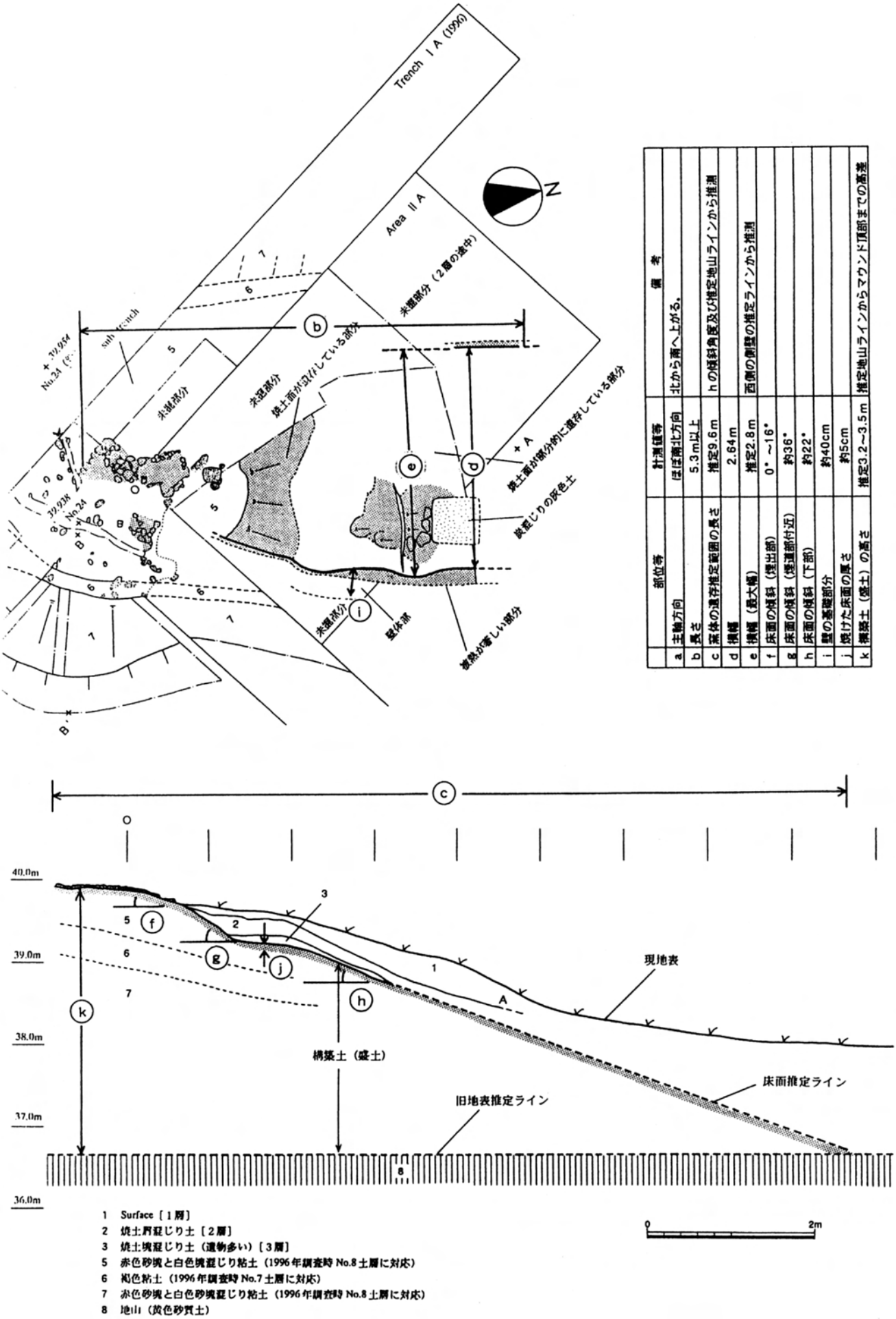
9月11日(金)

青柳、佐々木、田中、野上シェムリアップ朝発プノンペン着。中央市場で買い物をしてホテル着。夕方、宿泊中ホテル前の通りをデモ隊が行進。

9月12日(土)

治安が悪いという理由でホテル内待機。午後プノンペン夕発バンコク経由、9月13日(日)朝、成田・関西空港着。

発掘調査参加者および現場協力者。青柳洋治、佐々木達夫、田中和彦、野上建紀、丸井雅子、隅田登紀子、ラオ、カンボジア人上智研修所スタッフ4名、学生2名。Siyon Sophearith、An Sopheap、Som Visoth、Keo Kinal。タニ部落作業員・自警団員10名。APSARAのスンクン、ウックスンヘン、およびAPSARA遺跡警察官2名。



	部位等	計測値等	備考
a	主軸方向	ほぼ南北方向	北から南へ上がる。
b	長さ	5.3m以上	
c	窯体の遺存推定範囲の長さ	推定9.6m	hの傾斜角度及び推定地山ラインから推測
d	横幅	2.64m	
e	横幅（最大幅）	推定2.8m	西側の側壁の推定ラインから推測
f	床面の傾斜（煙出部）	0°～16°	
g	床面の傾斜（煙道部付近）	約36°	
h	床面の傾斜（下部）	約22°	
i	壁の基礎部分	約40cm	
j	焼けた床面の厚さ	約5cm	
k	構築土（盛土）の高さ	推定3.2～3.5m	推定地山ラインからマウンド頂部までの高差

Figure 3　タニ部落B区M１の窯壁基礎部分ライン復元図
Reconstruction of the foundation of the kiln wall, Kiln B1, Area B, Tani kiln complex

4．1998年9月のB区マウンド1の発掘

調査目的はB区M1の窯跡構造を明らかにし、今後のタニ窯跡群の研究・保存・公開の基礎資料とすることである。

南北方向に長く延びる低い砂丘状のダイク上にはタニ窯跡群のA区とB区がある。北側の窯跡群タニ窯跡群B区には7基のマウンドおよびその痕跡が残る。重ならない程度の近い位置に5基、そのグループと少し離れた北側に単独で低いマウンドが2基である。5基の窯跡が順次、近くに形成されたような配置である。現在のマウンドの高さはほぼ同じ程度で2～3m、径は15mほどである。マウンド1は1996年8月にトレンチ調査され、マウンド構成土は窯基礎構築土、窯の崩れ土、廃品であることが判明した。マウンド中央に窯跡基礎を構成する赤色と白色の径10cm前後の砂塊を含む粘土が積み上げられていること、3本のトレンチ部分には窯壁の崩れと廃品が層位的に堆積することが判明した。このため、窯跡の平面構造が円形状か長方形状かが問題になった。

1996年作成図は任意の海抜原点を設置したが、奈良国立文化財研究所地形測量図の海抜に合わせて＋2.5mすることになった。1996年作成M1実測図0ポイント（トレンチ交点）は37.3mから39.8mと変更する。1998年はマウンド1を4区に分け、交点は1996年調査時の0ポイントを東側に1m移す。この結果、ⅠA区はトレンチⅠAを含みトレンチⅠAの西側、ⅠB区はトレンチⅠBを含みトレンチⅠBの西側、ⅡA区はトレンチⅡの北側、ⅡB区はトレンチⅡを含みトレンチⅡの南側となる。

出土品の注記は、Kiln Site名、Area名、マウンド名、調査区名、出土層位(地点)名の順に記す。

1996年発掘時に十数本残した釘や木杭は、トレンチ端の2本の木杭が残ることが調査初日に判明した。しかし、調査初日に残っていた木杭2本が2日目にはない。奈良国立文化財研究所の地形測量のポイント24の釘がBM1の頂上部の木の根に残るが、同じく2日目には青色プラスチック部分が壊れ、釘だけ残る。トレンチ内埋め土撤去中にポイントを示す鉄釘4本を発見し、トレンチ跡及びポイントを正確に復元したことが確認できた。

1996年トレンチの埋土を排除する。セクションを再確認し、ⅡA区、ⅡB区を層位的に発掘し、ⅡA区で斜面を登る窯跡を地表下20～30cmほどで発見した。ⅡB区は表土と2層を発掘し、出土品は発掘区と層位で分けて採集した。

マウンド頂上部分には、窯室床と推定できる赤色焼土の塊が地表面に現れていた。しかし、窯壁の残存は見られなかった。表面を箒で清掃し、一部にトレンチを入れて、赤色焼土を厚さ数cmほど剥がした。下面は赤色砂塊と白色砂塊を含む硬い積み上げた粘土層である。この時点で円形状の窯跡の可能性は少なくなった。赤色砂塊の広がる範囲を1/10で実測し、撮影した。

1996年に発掘した3本のトレンチでは窯跡が見つからなかった。いずれも窯壁などの崩れ土と廃品が層位的に堆積していた。そこで、ⅡA区とⅡB区の表土を剥ぎ、マウンド中央部周辺の堆積状態を調べることとした。

ⅡA区の発掘。地表面の土を剥ぐと、マウンド頂上部分と類似した赤色土塊が現れる部分と、現れない部分があった。厚さ数cmほどの赤色焼土が現れる部分の下は、頂上部分と同じ赤色と白色の砂塊を含む硬い積み上げた粘土である。トレンチⅠAとトレンチⅡの間に、窯基礎を築くため、赤色と白色砂塊混じり粘土を積み上げて窯基礎マウンドを構築していたことが判明した。

当時の地表面だった砂地面上に最高部分で高さ3.2～3.5mほど粘土を、平面は長方形状で片側は傾斜して高くなるよう積み上げたことが、トレンチ内層位の状況などから推定できる。

赤色砂塊と白色砂塊が混じる厚い積み上げ灰褐色粘土面の上に、部分的に窯跡床面だった赤色焼土が残る。赤色焼土は赤色砂塊と白色塊粘土が焼成で数cmほど赤く変色したものである。床面の破壊程度が大きいが、基礎部分のラインは推定復元できた。窯跡の北側となる下方部分は未発掘であり、次回に調査する予定である。

窯跡平面形は中程がやや広くなる長方形状である。北側のマウンド裾部方向から南側のマウンド頂上部へ向かって登る。他の窯跡の床面重なりはない。同じ場所に1基だけが築かれた。床面の大きな修復はない。長さ5.3＋αm。室内最大幅2.64m。床面傾斜度22度。煙道部付近は傾斜度が急になり、36度である。壁基礎部分厚さ約40cm。赤く焼けた床面厚さ約5cm。

窯床上の堆積は、表土（1層）…、2層…。窯床上からは赤色焼土に埋まるような状態で焼けの甘い瓦片などが出土し、3層として取り上げた。床面上に焼成中の製品残滓は残らない。

また、窯跡内で数点の甕片が埋められたような状態で発見された。その下部で方形の灰混じり土も発見され、窯跡との関連を次回に調査することになった。

ⅡB区の発掘。表土を剥ぐ。1996年のⅠBトレンチとⅡトレンチの堆積状況に似た土層が現れる。窯跡はないことが明らかになり、廃品の層位的採集を続けたが、3層以下は次回の調査に譲ることとなった。（2層もまだ未発掘で残る）

出土品は、施釉陶器と無釉陶器である。窯道具と推定できる薄い円形、円筒状棒状品が出土した。コンテナ16箱分の破片を採集した。洗浄、注記、実測、撮影は次回調査に行うこととした。

発掘終了後、土嚢を積み、窯跡の埋め戻し現状保護を行った。次回調査は窯跡の下方半分の形態を明らかにし、炊口部を中心とした北方の廃品捨て場の存在等をトレンチ調査で確認することである。また、トレンチ内で工房跡や生産道具等の発見も期待している。今後、発掘した窯跡にたいし、どのような保存措置をとるかはタニ窯跡群全体の調査結果のなかで決めることになる。

次回以降の調査目的は、タニ窯跡群全体の保存活用を考える基礎資料を入手することになる。

5．今後の課題

将来は次の事項を研究する必要がある。窯跡の構造確認。窯跡群内の各窯跡の実態調査と比較。窯跡群どうしの比較。製品の分類。製品の編年。窯跡構造を製品の地域的特徴の把握。タイ東北部の窯跡群との構造や焼成技術、製品の比較。当時のアンコールの生産状況を知る手掛かりに加え、地域の生活や文化を復元する歴史的資料として活用すること。窯跡の保存、復元、展示、活用。